



Twitter



facebook



Instagram



YouTube

1	え	丨	み	。	ま	。	い	あ	ご	い	き	き	き	1
—	ん	。	お	か	た	い	づ	い	お	ち	ん	ん	ん	—
2	に	ひ	か	ね	お	の	く	み	じ	だ	ぜ	ぜ	ぜ	2
—	丨	イ	と	に	き	り	に	ん	の	い	い	い	い	—
3	と	た	な	む	あ	い	だ	じ	り	さ	ち	さ	と	3
—	ん	ア	っ	か	が	の	い	き	う	ん	う	い	お	—
4	で	か	て	っ	っ	ら	じ	ん	お	ぜ	お	ほ	ぼ	4
—	ぞ	の	丨	て	て	れ	の	の	お	ん	お	お	お	—
5	丨	丨	こ	丨	丨	か	あ	丨	あ	だ	お	び	し	5
—	い	か	の	つ	た	っ	る	み	い	い	お	く	お	—
6	り	わ	み	く	ち	ば	べ	ぎ	み	せ	た	た	り	6
—	に	な	を	い	ま	と	き	ん	ん	ん	い	い	う	—
7	け	丨	丨	丨	ち	ま	丨	な	の	せ	お	び	し	7
—	る	み	や	き	に	ろ	ぞ	丨	お	か	お	く	お	—
8	。	し	く	は	丨	ぶ	と	れ	じ	い	り	り	じ	8
—	ん	丨	。	丨	が	丨	ば	。	の	う	う	お	—	

謡
つ
て
み
よ
う
？
「
道
成
寺
」

謹請東方青龍清淨
謹請西方白龍
謹請中央黃體黃龍
一大三千大千世界の
恒砂の龍王哀愍納受。
哀愍慈懃のみぎんなれば
いづくに大蛇のあるべきぞと
。祈り祈られかつぱと転ぶが
また起き上がってたちまちに
。鐘に向かつてつく息は
猛火となってその身を焼く
日高の川波深
淵に飛んでぞ入りにける。

東方の青龍、西方の白龍、
（南方の赤龍、北方の黒龍）
中央の黄龍、そのほか全世界
の数限りない龍王よ、乞い願
わくは憐れみをたれて祈りを
聞きとどけたまえ。ここは龍
王の慈しむ聖地であるから、
邪悪な大蛇が存在してよから
ぞと、祈り祈られ倒れ伏し、
また起き上がって鐘に向かっ
てつく苦しい息は、かえって
猛火となりその身を焼く。日
高川の深みに飛び込んで姿は
見えなくなった。

「道成寺」 作者：観世小次郎信光 番立：四番目物



～あらすじ～

シテ・白拍子/蛇体 ワキ・道成寺住僧 ワキツレ・従僧 アイ・能力

紀伊の国、道成寺では、春爛漫のある日、再興した釣り鐘の供養が行われることになりました。住職は訳あって女性が来ても絶対に入れてはならぬ、とお触れを出しますが、一人の白拍子の女が供養の舞を舞わせてほしいと寺男（能力）に頼み込み、供養の場に入り込みます。女は乱拍子を踏み、舞いながら鐘に近づき、ついに鐘を引き被いてその中に入ってしまった。

ことの次第を聞いた住職は、道成寺にまつわる恐ろしい物語を語り始めます。それは、昔、真砂の莊司の娘が、毎年訪れていた山伏に裏切られたと思い込み、毒蛇となって道成寺の鐘に隠れた男を、恨みの炎で鐘もろとも焼き殺してしまったというものでした。

女の執念が未だにあることを知った僧達は、祈祷し、鐘を引き上げることが出来ましたが、鐘の中からは蛇体に変身した女が現れます。争いの末、毒蛇は鐘を焼くはずが、その炎でわが身を焼き、日高川の底深く姿を消していくのでした。

◎道成寺

文武天皇の勅願により橘(紀)道成なる者が建立したという奈良時代（701年）創建と伝わる古刹。本尊は千手観音立像(国宝)。

◎能「道成寺」の作者

観世小次郎信光（1450?～1516年）、世阿弥の甥っ子・音阿弥の七男。乱世を生きた信光の作風は、世阿弥などが幽玄を志向した時代よりショー的。信光作の能「鐘巻」を大胆カットしてエッセンスを抽出したのが能「道成寺」。「船弁慶」「紅葉狩」「遊行柳」なども信光の作品。

◎安珍・清姫伝説

奥州白河より安珍という僧（山伏）が熊野に参詣に来た。この僧は大変な美形であった。紀伊国牟婁郡（現在の和歌山県田辺市中辺路、熊野街道沿い）真砂（まなご）の庄司清治の娘、清姫は宿を借りた安珍を見て一目惚れし、女だてらに夜這いをかけて迫る。安珍は僧の身ゆえに当惑し、必ず帰りには立ち寄ると口約束だけをしてそのまま去っていった。

欺かれたと知った清姫は怒って追跡をはじめますが、安珍は神仏を念じて逃げのびる。安珍は日高川を渡るが、清姫は蛇体となりかわり日高川を泳ぎ切り、道成寺に逃げ込んだ安珍に迫る。梵鐘を下ろしてもらいその中に逃げ込む安珍。しかし清姫は許さず鐘に巻き付く。哀れ安珍は鐘の中で焼き殺されてしまうのであった。安珍を滅ぼした後、本望を遂げた清姫はもとの方へ帰っていき、道成寺と八幡山の間の入江のあるあたりで入水自殺したといわれる。

畜生道に落ち蛇に転生した二人はその後、道成寺の住持のもとに現れて供養を頼む。住持の唱える法華経の功德により二人は成仏し、天人の姿で住持の夢に現れた。実はこの二人はそれぞれ熊野権現と観世音菩薩の化身であったのである、と法華経の有り難さを讃えて終わる。

◎宮子姫伝説

応神天皇の時代、9人の兵士に日高の浦が下賜された。9人は漁を生業としたため、周辺地域は「九海士（の里）」とよばれるようになった。九海士の里に住む夫婦である早鷹と海女の渚は、子宝に恵まれないことから氏神の八幡宮にお祈りしたところ、女の子を授かった。そこで名前を八幡宮にちなんで「宮」と名づけた。ところが、成長しても宮には髪の毛が生えてこなかったため両親は悲嘆にくれていた。ある年、九海士の里は不漁に見舞われる。その原因は海底から差す不思議な光であった。宮の母である渚は「娘に髪の毛が生えないのは前世の報い」と考え、里の人々を救おうと罪滅ぼしのために自ら海に飛び込んだ。海中深く潜っていると、光輝くものがあつた。それは黄金色の小さな観音像であった。渚は持ち帰った観音像を大切に祀った。光の消えた海は大漁続きとなったため里人たちは渚のことを尊敬したが、彼女は謙虚に祈りを続けた。ある夜、渚の夢に観音が現れる。夢の中で髪の毛が生えない娘のことを訴えると、にわかに宮の髪が生えはじめた。年頃になると髪も伸び、宮は「髪長姫」と呼ばれるようになった。ある日、宮が黒くて艶のある髪をすいていると、雀が飛んできてその髪を一本くわえ、飛び去った。その雀は、奈良の都で勢力を誇っていた藤原不比等の屋敷の軒に巣をつくった。巣から垂れ下がる長く美しい黒髪を見つけた不比等は髪の毛の主である宮を探しだし、養女に迎え入れた。不比等の養女となった宮は「宮子」という名を授けられ、やがて文武天皇に見初められ后となり、奈良の東大寺を建立した聖武天皇の母となった。宮子は奈良に行っても故郷の九海士の里が忘れられず、特に残してきた観音のことが気になっていた。その悩みは文武天皇に届き、「宮子に黒い長い髪を授けてくれた観音様をお祀りする寺を造立せよ」と紀道成に勅命を出した。その寺があのだ道成寺だという。

「道成寺」

シテ 白拍子・蛇体
ワキ 道成寺住僧
ワキツレ 従僧
アイ 能力

名宜 ワキ「これは紀州道成寺の住侶にて候。さてもこの寺に撞鐘久しく退転仕りて候ふを。それがし再興いたし鐘を鑄させて候。今日吉日にて候ふ程に。鐘を鐘楼に上げ同じく供養をなさばやと存じ候。いかに誰かある

アイ「お前に候

ワキ「鐘を鐘楼に上げてあるか

狂言「さん候。鐘を鐘楼に上げ申して候

ワキ「同じく供養をなさうずるにて候。また存する子細の間 供養の庭へ女人かたく禁制と相触れ候へ

狂言「心得申して候

(鐘楼固め)

次第 シテ「作りし罪みも消えぬべし。作りし罪みも消えぬべし。鐘の供養に参らん

「これは此国のかたはらに住む白拍子にて候。さても道成寺と申す御寺に。鐘の供養の御入り候ふ由申し候ふ程に。唯今参らばやと思ひ候

道行 「月は程なく入り汐の。月は程なく入りしほの。煙みちくる小松原。急ぐ心かまだ暮れぬ。日高の寺に着きにけり。日高の寺に着きて候。やがて供養を

「急ぎ候ふ程に。日高の寺に着きて候。やがて供養を拝まうずるにて候

アイ「ようよう供養の庭へ……

シテ「これは此国の傍に住む白拍子にて候。鐘の供養にそと舞をまひ候ふべし。供養を拝ませて給はり候へ

アイ「さあらば某……

シテ「あら嬉しや涯分舞をまひ候ふべし。

(物着く執心の目付け)

「嬉しやさらば舞はんとて。あれにまします宮人の。烏帽子を暫し仮に着て。既に拍子を進めけり

次第 「花の外には松ばかり。花の外には松ばかり。暮れそめて鐘や響くらん

(地取く乱拍子)

ワカ 「道成の卿。承り。始めて伽藍。橘の。道成興行の寺なればとて。道成寺とは。名づけたりや。

地謡「山寺のや

(急ノ舞)

ワカ シテ「春の夕ぐれ。来てみれば

ノル 地謡「入相の鐘に花ぞ散りける。花ぞちりける花ぞ散りける

シテ「さるほどにさるほどに。寺々の鐘地謡「月落ち鳥鳴いて霜雪天に。満汐ほどなく日高の寺の。江村の漁火。愁に對して人人眠ればよき隙ぞと。立舞ふ様に狙ひよりて。撞かんとせしが。思へば此鐘恨めしやとて。龍頭に手をかけ飛ぶとぞみえし。ひきかづきてぞ失せにける

(鐘入り)

アイ「……落ちてござる……

ワキ「言語道断。か様の儀を存じてこそ。固く女人禁制の由申して候に曲事にてあるぞ。さらば立ち越え見うずるにて候

「はや拔群に煮え入って候。

語リ

ワキ「いまだ知ろし召さざりけり。これにつき恐ろしき物語の候を語って聞かせ候べし。かう渡り候へ

ワキツレ「心得申し候

ワキ「むかし此国の傍らに。まなごの庄司と云ふ者ありしが。一人の息女を持つ。又其頃奥よりも熊野詣の先達のありしが。庄司が許を定宿とし。年々泊まりけるに。いたいけしたる土産などを持ちて来り。庄司息女に与えはかば。庄司娘を寵愛の余りに。やああの客僧こそ汝が妻よ夫よなどと戯れけるを。をさな心に誠と思ひ年月を送る。又あるときかの客僧。庄司がもとに来りしに。彼の女申すよう。いつまでわれおぼすて置き給ふぞ。今は奥へつれてお下りあれと申す。客僧大きに驚き。夜にまぎれ逃げ去り此寺に来り。かようかよ次の次第によりこれまで参りたり。まっぴら助けてくれよと申す。この寺の老若談合しおよそに隠してはあしかりなと思ひ。その時の鐘楼を下ろしそのなかに隠す。また彼の女は。あますまじとてぼっかくる。をりふし日高川の水増りしかば。上下へと泳ぎありきしが一念の毒蛇となつて。日高川を易々と泳ぎ渡り此寺に来り。こゝかしこを尋ねありきしが。鐘のおりたるを不審に思ひ。龍頭を啗え。七まとひ纏ひ。尾にて叩けば。鐘はすなはち湯となつて山伏も即時に消えぬ。なんぼう恐ろしき物語にては候わぬか

ワキツレ「かよの御物語今こそ承りて候へ。我々の

存じ候は。年月の行徳もかような時の為にてこそ候へ。ひと祈りお祈りあつて。鐘をふたたび鐘楼に御

あげあれかしと存じ候

ノット

ワキ「さあらば面々も力を添えて給わり候へ

ワキ「水返つて日高川原の。真砂の数は尽くるとも。

行者の法力尽くべきかと

ワキツレ「みな一同に声をあげ

ワキ「東方に降三世明王

ワキツレ「南方に軍荼利夜叉明王

ワキ「西方に大威徳明王

ワキツレ「北方に金剛夜叉明王

ワキ「中央に大日大聖不動

ワキ、ワキツレ「動くか動かぬか索の。曩謨三曼陀曰羅赦。旋多摩訶遮那。娑婆多耶咩多羅干。聴我説者得大智慧。知我身者即身成仏と。今の蛇身を祈るうへは

ワキ「何の恨か有明の。撞鐘こそ

ノル

地謡「すはすは動くぞ祈れたゞ。すはすは動くぞ祈れたゞ。引けや手ん手に千手の陀羅尼。不動の慈救の偈。明王の火焰の。黒烟を立て、ぞ祈りける。祈り祈られつかねど此鐘ひゞきいで。引かねど此鐘躍るとぞ見えし。程なく鐘楼に引きあげたり。あれ見よ蛇体は。現れたり

(イノリく鱗落しく柱巻き)

キリ

「謹請東方青龍清淨。謹請西方白龍謹請中央黄体黄龍一大三千大千世界の恒沙の龍王哀愍納受。哀愍じきんのみぎんなれば何処に大蛇のあるべきぞと。祈り祈られかつばと転ぶが。又起き上つて忽ちに。鐘に向つてつく息は猛火となつてその身を焼く。日高の川浪深淵に飛んでぞ入りにける。望足りぬと驗者達はわが本坊にぞ帰りける我が本坊にぞ帰りける